

氏 名	よし だ ひろし 吉 田 寛
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 305 号
学位授与の日付	平成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 思 想 文 化 学 専 攻
学位論文題目	ウィトゲンシュタインの「はしご」 ——『論考』における「像の理論」と「生の問題」——

論文調査委員	(主 査) 教 授 伊 藤 邦 武	助教授 出 口 康 夫	助教授 中 畑 正 志
--------	----------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考 (Tractatus Logico-Philosophicus)』は、20世紀の哲学に最も大きな影響を与えた書物の一つである。しかしながら『論考』は極端に簡潔で断片的な文体によって書かれており、非常な難解をもって知られている。それゆえ、このテキストに対しては過去さまざまな解釈が試みられ、『論考』の解釈史自体が20世紀哲学の興味深い一つの潮流を形成しているとさえ言えるのである。本論はこれら過去のおびただしい先行解釈を踏まえつつ、『論考』に対して改めて新たな独自の解釈を与えようとしたものである。

論者は本論の第一章第一節から第四節までにおいて、過去の『論考』解釈をいくつかの観点から整理し、その中で自説の位置づけを試みている。それによれば、過去の諸解釈は、ラッセル、エイヤー、アンスコムらに代表される「論理的解釈」、トゥールミンやエンゲルマンらの「倫理的解釈」、ストックホフや、野矢茂樹、鬼界彰夫、細川亮一などわが国において最近相次いで出版された研究からなる「ハイブリッド解釈」、さらには近年欧米の哲学界で話題を呼んでいる、ダイヤモンド、コーナントらによるいわゆる「新しい解釈」に分類される。

これらのうち、論者が最も注目するのは第一章第三節で詳説される「新しい解釈」である。この解釈は、『論考』を後年の『哲学的探求』と同様一種の「治療」の書と読む解釈である。その解釈によれば、『論考』はさまざまな独我論的な世界観を一見もっともらしいものとして読者に対して提示する一方で、最終的にそれらが無意味なナンセンスであることを示し、読者をして独我論的な世界観を捨て、他者理解の重要性へと目を開かしめることを意図した書物であることになる。つまり、『論考』本文の中に登場する「像の理論」と呼ばれる言語観や独我論的な傾向を持った章句、さらには倫理的な章句は、すべて読者を一時的に説得するという心理的效果を担われた、いわば「疑似餌 (ルアー)」に過ぎないとされるのである。

論者はこの「新しい解釈」を、『論考』のテキストにダイナミックな構造を読み込むことで、これまでの諸解釈がなしえなかった仕方ではテキスト全体に対して統合的な読解を与えていると評価する。しかしこの解釈が、『論考』本文を単なる心理的なルアーとして否定的に捉えている点に不満を示し、それをより積極的に、「生の全面的な肯定」という目的を達成するための、客観的ないし間主観的な有効性を備えた「メソドロジー」として読む、という独自の解釈を提案するのである。

『論考』全体を「生の全面的な肯定」のための「メソドロジー」として読むという論者の解釈は、第一章第五節と第三章第一節において示されている。その中で特に、「生の全面的な肯定」とは、「何らかの目的のために生きる」のではなく、「生きることそのものを目的とする」態度であり、「自分の生を全体として否定する行為」として捉えられた「自殺」を拒否するような生き方として規定されている。以下、論者は『論考』において、読者を最終的にはこのような生き方へと後押しすることを目指して構成された「世界観」が提示されていること、そしてその世界観への到達のステップが順次注意深く配置されていることを、テキストに沿いつつ示していくのである。

まず第二章で、『論考』前半部の言語論、いわゆる「像の理論」が「現実主義的で実在論的な言語理解の理論」として解釈された上で、その理論が「メソドロジー」という全体の枠の中で、「(現実)世界は、可能世界の一部ではなく、むしろそ

の根源・制約となるものである」という世界像を提示する役割を担っていることが指摘される。ここで言われる「言語理解」とは、話者による言語習得のことである。その習得の第一段階に「名」の指示対象を理解するという段階が来るが、この場合に指示対象として示されるものが、話者にとって直知可能な現実の「対象」でなければ、そもそも指示対象の習得ができないと論者は論じ、これはウィトゲンシュタインも持っていた洞察であると主張する。そしてこの洞察によれば、名の指示対象は全て現実の対象でなければならず、われわれはあくまでその現実の対象を様々な仕方で組み合わせることで、（非現実的という意味での）可能な「事実」について語りうるようになるのである（ここでいう「事実」とは「対象」の組み合わせである）。このようにして語り出された「可能な事実」は、どこまで行っても出発点となった「現実の対象」に制約されている。というのも、「可能な事実」は、あくまでも「現実の対象」を（非現実的な仕方ではあっても）一定の仕方で組み合わせたものに過ぎないからである。このような意味で、「現実の対象」の「総体」としての「（現実の）世界」が、「可能な世界の一部ではなく、その根源・制約である」とされるのである。

次に、第三章第二節から第四節までにおいては、『論考』中ほどの独我論的な章句から、「世界とは私の生に他ならない」という世界と私の生の一体性・同一性の主張が導出されるとともに、これらの両者がともに、「他の私」「他の世界」というものを原理的に持たないという意味で、唯一的なものであることを示す世界観が導出されることが確認される。

そして、第三章第五節では、『論考』末尾近くの倫理的な章句において、「私の生」即ち「世界」は、全体として必然的であり、その一部を起こりえたが現実には起こらなかった事態と入れ替えて、いわば部分的に否定することができないものとして示されている、という解釈が示される。この「世界が必然的である」という主張は、第二章で再構成された「（現実）世界は可能的世界の一部ではなく、その根源・制約」であるという世界観を受けてなされている。そして、ここで必然的であるとされているのは、先に触れたように、「現実の事実の総体」としての「世界」ではなく、「現実の対象の総体」としての「世界」である。したがって、このように見れば「私の生」ないし「世界」に対する態度については、それを全面的に肯定するか否定するかのいずれしかないことになり、このいわば究極の選択は、私の「意志」に委ねられているとする主張も、同じ箇所から読み取られる。ここから、「私の生」即ち「世界」を全面的に肯定する受け取り方として、それを「美」として見る美的な態度、あるいは「奇跡」として見る宗教的な態度が例として示されることになるのである。

このように、テキストにおいて世界観を順次受け入れていくという読書体験によって、『論考』の読者は、最終的には世界を全体として一挙に肯定するか否定するかという選択の場にまで導かれ、肯定的な選択の事例を示された上で、その選択を迫られることになる。ここで重要なのは、この選択が『論考』における論証からの結論として、いわば必然的・演繹的に導かれるものではなく、全面的に読者の自由な選択に委ねられている点である。ここにおいて、『論考』の前半部において展開されているような哲学的論証と、美的体験・宗教的体験の選択という行為、さらには美的体験・宗教的体験そのものの間には、意志による飛躍によってしか埋めることのできない大きな深淵が横たわっていることが、自ずから見て取られることになる。「生の全面的な肯定」という美的・宗教的体験と、哲学的論証とは、この深淵をはさんで、互いに全く異質な活動であり、互いにとって「無意味・ナンセンス」としか表現できない存在として現れる。周知のように『論考』末尾には、『論考』自体をナンセンスと断じ、それをあたかも上りきった「はしご」を投げ捨てるように捨て去ることを勧める、謎めいた文章が書かれているが、論者はこの文章が、このような洞察に裏付けられて書かれたものであると見なすのである。

最後の第四章では、論文全体の総括がなされるとともに、ストックホフや野矢茂樹、鬼界彰夫、細川亮一といった近年の『論考』諸解釈が改めてとりあげられ、それらと本論の立場との異同が確認される。その中で強調されるのは、客観的な有効性をもった「メソドロギー」としての『論考』本文の位置づけである。『論考』は、当時自殺衝動に悩まされていたウィトゲンシュタインの個人的な救済のためだけに書かれたプライベートな覚書ではなく、同じような悩みを抱えた不特定多数の読者に向けて公開された書物であることに、論者は注意を促す。そのような公刊著作として、『論考』は、一方で極めて個人的な色彩を持ちながらも、同時に、そこで提示される世界像は、生を全面的に肯定する選択を迫るステップの連鎖として、少なからぬ読者に対して等しく効果的な視座を提供することを意図して書かれており、実際にそのような客観的な効力を十分持ちえていると論者は言う。論者は、『論考』がこのような深い私秘性と広い公共性を兼ね備えた哲学の古典として、アウグスティヌスの『告白』やパスカルの『パンセ』の系譜に位置づけられるのではないかという評価を提示して、本論を終えている。

論文審査の結果の要旨

本論は、20世紀の哲学を代表する哲学書の一つとも言えるウィットゲンシュタインの『論理哲学論考』に対して、新たな独自の解釈を統一的に与えようと試みた研究である。『論考』は非常に短い断片的な章句の積み重ねからなるというそのスタイルからして、解釈のかなり困難なテキストであるが、そのみならずその全体の構成にかんして、テキストの大部分を占める言語と論理、世界と一人称的主体「私」との関係についての、言語哲学的・認識論的・存在論的な章句の後に、唐突とも言える仕方で倫理についての短い章句が続くという、構造上の問題を抱えており、特にその最後が、『論考』全体の叙述を「ナンセンス」と断じ、読者に対してそれまでの議論を上りきった「はしご」のように投げ捨てることを勧める、自己否定的とも取れる章句で終わっているという点で、極めて謎めいた書物である。それゆえ『論考』に対しては、その公刊直後から今日にいたるまで、実にさまざまな解釈（たとえば論理実証主義としての『論考』、神秘的宗教思想としての『論考』、近年わが国において野矢茂樹や鬼界彰夫らによって発表された「ハイブリッド解釈」、主としてアメリカで支持を得ているコーラ・ダイヤモンドやジェイムズ・コーナントらの「新しい解釈」、等）が競うようにして提案されてきたが、その個々の議論の細部からテキスト全体の執筆の意図に至るまで、いまだに完全な解釈上の合意を得ていないのが現状である。

『論考』をめぐるこのような解釈状況の中で、論者はこのテキストを、「生の全面的な肯定」のための「メソドロジー」と読む、という解釈を提案する。この解釈は基本的に、これまでの諸解釈を保守的として強く批判するダイヤモンドやコーナントらのいわゆる「新しい解釈」の流れを汲むものであるが、ダイヤモンドらが『論考』本文の実質的な議論を、哲学的な諸問題の脱構築のための単なる心理的な疑似餌と見るのにならして、それらの議論の真理性を前提にしながら、「生の肯定」へと至るはしごの各ステップとしての役割を明確にするという仕方で、最終的には投げ捨てられるべきはしごの構成部分の、より積極的な意義を確保するような新たな視点を提出しようと試みたものである。そこには、以下のような特筆に値する点が含まれている。

まず、本論の長所として挙げるべき点は、『論考』のテキストを、読者を「生の全面的な肯定」へと誘うために、順次繰り出される世界観の連なりとして再構成することで、その書物の全体を一つの統一的な描像の下に描ききっている点にある。『論考』というテキストを、一定の治療意図をもって周到に配置された読書体験を次々に読者に与えていく、一つのダイナミックな仕掛けとして読み解くのは、ダイヤモンドらの「新しい解釈」の特徴である。論者は、「新しい解釈」のこのような手法を十分に消化するとともに、先行研究とは異なる視点から、倫理的章句の突然の登場の説明、自己否定的なコメントの解釈といった、『論考』解釈上の数々の難問に対して、一つの整合的な解答を与えることに成功している。

また、本論の読解作業において特筆に値する第二の点は、『論考』前半部を占める言語論、いわゆる「像の理論」に対して、斬新で説得的な解釈を提示するとともに、そこから独特の存在論・世界観を析出させたことである。論者はウィットゲンシュタインのこの言語論を、「名」の指示対象の学習を柱とする言語習得の理論として捉えるとともに、他方で、話者にとって直知できる現実の対象でなければ、指示対象の特定と習得ができないという洞察に訴えることで、この理論に、「名の指示対象は現実の対象に限られる」という現実主義的な言語観と、「指示対象は、現実の対象として与えられており、我々は指示対象を規約によって恣意的に約定することはできない」という反規約主義的な言語観を読み込んでいる。これは「像の理論」を巡る極めて多様な諸解釈の中でも、説得力のある有効な解釈として、今後十分に評価される解釈であろうと思われる。

さらに、論者はウィットゲンシュタインが言う「事実」とは、「対象を組み合わせる構成されるもの」であることに着目し、「像の理論」から、「現実の対象の総体」としての「世界」は可能な事実の一部ではなく根源である」という存在論を抽出するが、現実世界の根源性というこの独特の存在論を『論考』の言語論から導き出した点も、論者の卓見であると考えられる。

一方、本論にはいくつかの問題点も残されている。その一つは、本論が提出する解釈のキーワードである「生の全面的な肯定」や「メソドロジー」といった概念が、いまだ完全には明確化されていないという点である。例えば、論者は「生の全面的な肯定」の実質的な内実の一つとして、「自殺衝動からの解放」を挙げているが、前者が後者に還元、回収されるのか、そうではないのかに関しては必ずしも明快な見通しを与えていない。もしも還元されるとすると、『論考』とは、明確に定

義され成否の確認も容易な目標を設定し、それを達成しようとする、プラグマティックなテキストとして読みうることになる。反対に還元されないとすると、『論考』は新たな世界観的理解の提案を意図した、一種の世界観哲学の書と言われることになる。論者は「メトロロジーとしての書」という概念のもつこうした曖昧さについて、さらに細かい神経を配るべきであったといえよう。

また論者は本論全体を通じて、「生の全面的な肯定」が『論考』の目的であったことを一つの作業仮説として立て、この仮説の下で『論考』のテキストが整合的に再構成できることで、テキストの表面に明示的には現れないこの思想に対する証拠の欠如を補おうという、一種の仮説演繹法的な手法に訴えている。しかし、本論後半の「倫理的章句」を巡る議論は、「像の理論」を対象とする前半の作業に比べて、テキストとの対応づけや再構成の錬度にかんして不十分な点をいくつか残している。この点を考慮すると、この解釈は仮説演繹的な作業としては、いまだ完全には完成していないとも考えられる。

しかし、以上の問題点は、論者のさらなる研鑽によって改善されることが十分に期待できるものである。またワイトゲンシュタインのテキストや草稿類のみならず、フレーゲ、ラッセルなど関連する哲学者の著作にも幅広く目を配り、多数の研究書、関連書物をも渉猟した論者の多年の努力は、大いに評価されてしかるべきものである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2005年1月21日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。